



国際協力機構(JICA)海外協力隊員として、ドミニカ共和国の北東部にあるサマナ県の女性市民団体で働いている。同県は首都サントドミンゴから北東に約100キロ、車で約3時間半のサマナ半島に位置する。毎年1〜3月、クジラが繁殖



ドミニカ共和国
内山温子さん(30)
広島市中区出身



屋外水槽で飼育するテラピアの成長を
スタッフと確認する筆者(右端)

がいたぐらい。それでも現地の人が「魚の専門家なの？」と興味深そうに聞いてくる。うそもつけないので、「大学で経済を勉強した」と言うしかなかった。また、スペイン語も初心者レベルなので現地

仲を深め変化した姿勢

けんの製造・販売だった。ところが、着任するとそうした事業はほぼやっておらず、前年からアフリカ原産の淡水魚テラピアの養殖事業を始めた」と説明された。

正直、養殖にまったく興味なかった。魚の飼育経験といえば、幼少期に飼っていたグッピーや夏祭りの金魚くらいである。かろうじて祖母の家の池にコイ

の人の不安な表情が見て取れる。でも、私の派遣職種は「コミュニティ開発」なのだ。すごくかみ砕いて言えば「その地域の人々の暮らしを良くすること」が目的である。ただどう貢献するのか分からなくても魚が嫌で日本に帰るわけにはいかない。昨年、ここで30歳を迎え、大卒の社会人なら8年目のころ。気持ちを切り替え「現地の人に学び、仲良くなる」をモットーに職場へ通いつめることにした。そうしていると魚への興味が少しずつ湧いてきた。テラピアはカラフルなので祖母宅のコイを思い出す瞬間もある。飼育法などの疑問をネットで調べると、私もやらぬ発見もあった。私は魚の専門家ではないが、誰しも何かできることがあると聞いて聞かせている。今は餌の費用をコストダウンするため、市販ではなく自家製に切り替えるべく取り組んでいる。少しでも何かできることはないか、スローペースだが前を向いていきたい。